

公演日程

A program

第1588回 NHKホール
1/27[土] 開演 6:00pm
1/28[日] 開演 3:00pm

The 1588th Subscription Concert
on 27th (Sat.) & 28th (Sun.) January
at 6:00 (Sat.) 3:00pm (Sun.) in the NHK Hall

指揮 シャルル・デュトワ
メゾ・ソプラノ デニス・グレーヴス*
オルガン ギラン・ルロワ**
コンサートマスター 堀 正文

Charles Dutoit, conductor
Denyce Graves, mezzo soprano*
Ghislain Leroy, organ**
Masafumi Hori, concertmaster

モーツァルト／交響曲 第35番 二長調 K.385
「ハフナー」(18')

Wolfgang Amadeus Mozart (1756-91)
Symphony No. 35 D major K.385
"Haffner"

- I アレグロ・コン・スピリト
- II アンダンテ
- III メヌエット
- IV プレスト

- I Allegro con spirito
- II Andante
- III Menuetto
- IV Presto

ベルリオーズ／叙情的情景「クレオパトラの死」*(22')

Hector Berlioz (1803-69)
"La mort de Cléopâtre", scène lyrique*

休憩

Intermission

サン・サーンス／歌劇「サムソンとデリラ」作品47
— デリラのアリア「あなたの声に心は開く」*(7')

Camille Saint-Saëns (1835-1921)
"Samson et Dalila" op.47
- Aria "Mon coeur s'ouvre à ta voix" (Dalila)*

サン・サーンス／交響曲 第3番 八短調 作品78**(36')

Camille Saint-Saëns
Symphony No.3 c minor op.78**

- I アダージョ — アレグロ・モデラート — ポーコ・アダージョ
- II アレグロ・モデラート — プレスト — アレグロ・モデラート
— プレスト — マエストーソ — アレグロ

- I Adagio - Allegro moderato - Poco adagio
- II Allegro moderato - Presto - Allegro moderato - Presto - Maestoso - Allegro

公演日程

B program

第1587回 サントリーホール

1/17[水] 開演 7:00pm

1/18[木] 開演 7:00pm

The 1587th Subscription Concert
on 17th (Wed.) & 18th (Thu.) January
at 7:00pm in the Suntory Hall

指揮 シャルル・デュトワ
ピアノ ジャン・フィリップ・コラルル
コンサートマスター 篠崎史紀

Charles Dutoit, conductor
Jean-Philippe Collard, piano
Fuminori Shinozaki, concertmaster

ラヴェル/優雅で感傷的なワルツ(16')

Maurice Ravel (1875-1937)
Valses nobles et sentimentales

- I 中ぐらいの速さで
- II とてもゆっくりと
- III 中ぐらいの速さで
- IV とても生き生きと
- V 少しゆっくりと
- VI とても活発に
- VII 活発さを減じて
- VIII エピローグ: ゆっくりと

- I Modéré
- II Assez lent
- III Modéré
- IV Assez animé
- V Presaeu lent
- VI Assez vif
- VII Moins vif
- VIII Epilogue: Lent

ラヴェル/左手のためのピアノ協奏曲 二長調(19')

Maurice Ravel
Concerto pour la main gauche D major

レント — アレグロ — レント

Lento - Allegro - Lento

休憩

Intermission

チャイコフスキー/交響曲 第6番 口短調 作品74 「悲愴」(46')

Pëter Il'ich Tchaikovsky (1840-93)
Symphony No.6 b minor op.74 "Pathétique"

- I アダージョ — アレグロ・ノン・トロッポ
- II アレグロ・コン・グラチア
- III アレグロ・モルト・ヴィヴァーチェ
- IV フィナーレ: アダージョ・ラメントーソ

- I Adagio - Allegro non troppo
- II Allegro con grazia
- III Allegro molto vivace
- IV Finale: Adagio lamentoso

公演日程

C program

第1586回 NHKホール
1/12[金] 開演 7:00pm
1/13[土] 開演 3:00pm

The 1586th Subscription Concert
on 12th (Fri.) & 13th (Sat.) January
at 7:00pm (Fri.) 3:00 pm (Sat.) in the NHK Hall

指揮 シャルル・デュトワ
ピアノ ユジャ・ワン
メゾ・ソプラノ イリーナ・チスチャコヴァ*
合唱 東京混声合唱団*
合唱指揮 山田和樹*
コンサートマスター 篠崎史紀

Charles Dutoit, conductor
Yuja Wang, piano
Irina Tchistjakova, mezzo soprano*
Tokyo Philharmonic Chorus, chorus*
Kazuki Yamada, chorus master*
Fuminori Shinozaki, concertmaster

プロコフィエフ/古典交響曲 作品25(15')

- I アレグロ
- II ラルゲット
- III ガヴォット: ノン・トロppo・アレグロ
- IV フィナーレ: モルト・ヴィヴァーチェ

Sergei Prokofiev (1891-1953)
Symphonie classique op.25

- I Allegro
- II Larghetto
- III Gavotta: Non troppo allegro
- IV Finale: Molto vivace

プロコフィエフ/ピアノ協奏曲 第2番 ト短調 作品16(31')

- I アンダンティーノ
- II スケルツォ: ヴィヴァーチェ
- III 間奏曲: アレグロ・モデラート
- IV フィナーレ: アレグロ・テンペストーソ

Sergei Prokofiev
Piano Concerto No.2 g minor op.16

- I Andantino
- II Scherzo: Vivace
- III Intermezzo: Allegro moderato
- IV Finale: Allegro tempestoso

休憩

Intermission

プロコフィエフ/カンタータ「アレクサンドル・ネフスキー」 作品78*(36')

- I 蒙古人の圧制にあえぐロシア
- II アレクサンドル・ネフスキーの歌
- III ブスコーフの十字軍士
- IV めざめよ、ロシア人民
- V 氷上の戦い
- VI 激戦のあと
- VII アレクサンドルのブスコーフ入城

Sergei Prokofiev
"Alexander Nevsky", cantata op.78

- I Russia under the Mongolian Yoke
- II Song about Alexander Nevsky
- III The Crusaders in Pskov
- IV Arise, ye Russian People
- V The Battle on Ice
- VI Field of the Dead
- VII Alexander's Entry in Pskov



指揮 conductor
シャルル・デュトワ
Charles Dutoit

スイス・ローザンヌ生まれ。ベルン管弦楽団音楽監督、チューリヒ放送管弦楽団指揮者兼音楽監督を経て、77年～2002年モントリオール交響楽団音楽監督。同響を率いた功績は大きく、95年にはケベック州政府からケベック勲章のグラントフィシエ（勲2等）を、カナダ芸術連盟からは2度表彰されている。

1990年以來ニューヨークで開催されるフィラデルフィア管弦楽団の夏季音楽祭で芸術監督と首席指揮者を務めるほか（91年フィラデルフィアの名誉市民にもなっている）、91年から2001年にかけてフランス国立管弦楽団の音楽監督を兼務。

オペラにおいても、20代前半に、カラヤンの招きによってウィーン国立歌劇場管弦楽団を指揮して以来、コヴェント・ガーデン、メトロポリタン歌劇場、ベルリンドイツ・オペラを定期的に指揮。ロサンゼルス・ミュージック・センター・オペラでの新演出によるベルリオーズ《トロイ人》では、高い評価を受けた。

96年N響常任指揮者に就任。98年デッカのスタッフが来日し、N響とプロコフィエフ《ロメオとジュリエット》を録音、CDリリースしている。

98年9月N響初の音楽監督に就任（2003年まで）。デュトワとN響は、93、95～2003年、ヨーロッパ、アメリカ、アジアへの外国公演を行っている。2003年9月からN響名誉音楽監督。宮崎国際音楽祭と中国・広東国際夏季音楽アカデミー音楽監督も務める。

88年カナダの最高の功労勲章でありエリザベス皇太后も受章したカナダ勲章の名誉オフィサー章が贈られている。

メゾ・ソプラノ mezzo soprano

デニス・グレーヴス

Denyce Graves



デニス・グレーヴスは世界で最も人気のあるメゾ・ソプラノの1人。とくにビゼー《カルメン》のタイトル・ロールとサン・サーンス《サムソンとデリラ》のデリラ役では定評がある。1966年ワシントン生まれだから、今年はおよそ40歳。メゾ・ソプラノとしてはまさに円熟の時を迎えている。

彼女は91年にパリの国際音楽コンクールで第1位を受賞して注目されたが、国際的な名声を得たのは、95～96年のシーズンにメトロポリタン歌劇場に《カルメン》でデビューして大成功を収めてからで、以後この役を世界各地で歌っている。日本でも2000年にモンテカルロ歌劇場のソリストとして来日し、ロベルト・アラニーヤと共演してカルメンを歌い、絶賛された。このときに聴いたのだが、厚みのあるちょっと暗めのパワフルな声と、誇り高い強いカルメン像がとても印象に残っている。

前述の2つの役のほかにはマスネ《ウェルテル》のシャルロッテ、バルトーク《青ひげ

公の城》のユディット、ベルリーニ《ノルマ》のアダルジーザ、ヴェルディ《リゴレット》のマッドレーナなどを得意にしている。また最近ではヴェルディ《トロヴァトーレ》のアズチーナ役も歌っている。初来日は95年で、この時はリートやオペラ・アリアなどを中心としたリサイタルを行った。2000年の来日時には日本でも「オペラ・アリア集」のCDがリリースされている。ワシントン・オペラではブラシド・ドミンゴともたびたび共演しており、またスカラ座ではリッカルド・ムーティとも共演するなど、世界の一流歌劇場でトップ・クラスのアーティストとして活躍を続けている。

今回は彼女が最も得意とする《サムソンとデリラ》からの名アリアに加え、ベルリオール初期の作品《クレオパトラの死》でもその声を披露することになっている。

(石戸谷結子)

オルガン organ

ギラン・ルロワ

Ghislain Leroy



ギラン・ルロワはオルガニストである両親のもと、1982年、フランスのトゥールコワン市に生まれた。中高生の時にオルガンだけでなく、ピアノと作曲を学ぶ。2000年、インディアナ大学（アメリカ、ブルーミントン校）に留学。2001～2003年にルイユ・マルメゾン国立地方音楽院でフランソア・アンリ・ウバールに師事、首席で卒業した。

2003年パリ国立高等音楽院のジャン・フランソア・ジゼルの和声のクラスに入学、同時にリヨンの国立高等音楽院でジャン・ボワイエ、ルイ・ロビリヤールのオルガンのクラスに通い、リエズベット・シュランベルジュ、フランソア・エスピナスにも師事した。作曲家・オルガニストのグザビエ・ダラス（リヨン国立高等音楽院オルガン科教授でもあった）を研究課題に、リヨン国立高等音楽院に保管されている資料蔵書の目録作成も行った。2006年6月に同校卒業。

ルロワが国際的なキャリアのスタートを切ることになったのが、2004年第5回パリ市主

催オルガン国際コンクール（審査員長：ミシェル・シャピュイ）でのグランプリ受賞。以来、定期的にパリをはじめフランスの主立った教会でコンサートに出演、ヨーロッパやロシアの大きなフェスティバルに招待されている。

レパートリーは17世紀から現代まで幅広い。ジャン・ルイ・フロランツ、ジャン・ピエール・ルゲ、ヴァレリー・オベルタン、トマ・ラコット等、伝統的な作品と同時代の作品をともに取り上げるプログラミングによって、現代の作品も積極的に聴衆に紹介している。

CDも2枚制作（2004年、ボンデュ市の新しいオルガン使用。2006年、ラジオ・フランスのオリヴィエ・メシアン・ホールのゴンザレス・ドラグッシーのオルガン使用）。

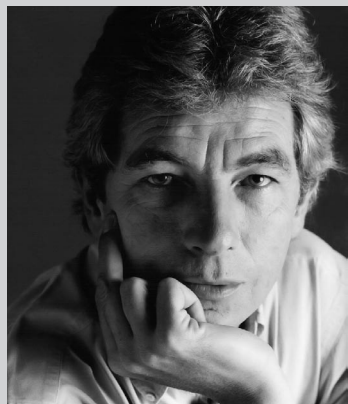
現在、2006年9月から札幌コンサートホール第9代専属オルガニストも務める。N響とは初共演。

（小倉多美子）

ピアノ piano

ジャン・フィリップ・コラル

Jean-Philippe Collard



1948年フランス・シャンパーニュ地方、マルイユ・シュレ生まれ。1歳上の姉カトリーヌもピアニストだった(93年早世)。名教授ピエール・サンカンに師事して、16歳でパリ国立高等音楽院を卒業。コラルが学んだ時代は、B.リグット(45年生)、J.ルヴィエ(47年生)、M.ペロフ(50年生)、P.ロジェ(51年生)等、巨匠サンソン・フランソア亡き後のフランス・ピアノ界を牽引していくスターを輩出した時代。コラルとペロフはデュオを組み、ドビュッシー等に名盤を生み出している。

69年ロン・ティボー国際コンクール第5位、70年ジョルジュ・シフラ国際コンクール優勝によって、一躍脚光を浴びることになる。72年マレ音楽祭で国内デビューを果たし、以後、世界各国へと活躍の場を拡げた。75年27歳の時に初来日、美形とフランス近代作品の好演で多くのファンを獲得した。

50枚を超える録音には、ソロ、室内楽、『グラモフォン』誌の最優秀協奏曲録音賞を受賞したラヴェルの協奏曲(マゼール指

揮フランス国立管弦楽団)など、多岐にわたるが、やはり特筆すべきは「フォーレ・ピアノ音楽全集」(EMI、70~84年)、「ラヴェル・ピアノ作品集」(EMI、76~80年)だろう。またA.デュメイ(vn.)とミュイール弦楽四重奏団との「ショーソン:コンセール・21」はフランスのレコード大賞を受賞しているし、デュメイとのフランク等にも名盤を刻み、昨年12月にやはりEMIから復刻盤がリリースされている。

一時期日本での公演が減ったが、近年再び来日が増え、このN響公演も、聴くたびに新鮮な驚きをもたらすコラルの演奏に触れられる好機となった。2003年フランス政府からレジオン・ドヌール勲章授与。

(小倉多美子)

ピアノ piano

ユジャ・ワン

Yuja Wang



1987年北京生まれ。6歳でピアノを学び始め、中国音楽教育機関の最高峰の1つ、北京の中央音楽学院に進学。2001年ザイラー国際ピアノ・コンクール第1位、第1回仙台国際音楽コンクールピアノ部門第3位および審査委員特別賞を受賞など、上海やフランスも含め、10代から国内外でのコンクール入賞歴を築き、頭角を現した。同時に、リサイタルやコンチェルトのソリストとしての活動も活発で、99年にはパリで第1回「ミド」コンクール・デ・ティアノ・シノ・フランセ優勝者としてリサイタルを開く。国内でも、2000年11月、シュー・ツォン(p.)、ジャン・ワン(vc.)が出演した「音楽家2世代に渡る対話」コンサートに出演、次世代を担うピアニストとして位置づけられている証左だろう。

2003年9月、デーヴィッド・ジンマン指揮チューリヒトーンハレ管弦楽団とのベートーヴェン《ピアノ協奏曲第4番》でヨーロッパデビュー。

2002年に参加したアスペン音楽祭で、コンチェルト・コンクールに優勝し北米でも才能を印象付け始めていたが、2004年には、北米でユジャ・ワンの名を拡める大きな成功に出会うことになる。カーネギーホール

でのレオン・フライシャーによる「Leon Fleisher Young Artists Concert」(ワークショップを含む)や、ケネディ・センター・テラス・シアターでのレオン・フライシャー・マスタークラス(客席数約500でチケット入手が困難なシリーズの1つと伝えられる)に選ばれ、新たな才能の登場を印象付けている。2005年にはラドゥルプーの代役として、ピンカス・ブーカマン指揮ナショナル・アート・センター・オーケストラ(オタワ)と共演、成功を収めた。カーティス音楽院で名手ゲラリー・グラフマンのもとで3年間学ぶ。昨年3月には、「サラ・リー・リサイタル・シリーズ」をキャンセルせざるを得なくなったマレイ・ペライアの代役としてシカゴ・シンフォニー・センターにデビュー。ここでも好評を博している。11月にはロリン・マゼール指揮ニューヨーク・フィルと来日し、リスト《ピアノ協奏曲》を聞かされたばかり。キャリアを積んで行こうとする才能ある21歳以下のピアニストに贈られる(2年おきに選出)「ギルモア・ヤング・アーティスト」の2006年のアーティストに選ばれている。

(小倉多美子)

メゾ・ソプラノ mezzo soprano

イリーナ・チスチャコヴァ

Irina Tchistjakova



イリーナ・チスチャコヴァはロシア生まれのメゾ・ソプラノ。モスクワのロシア国立グネーシン音楽院を卒業し、翌年からモスクワ市立歌劇場のソリストとしてキャリアをスタートさせている。プロフィールから推定するに、おそらくは30代の半ばで、メゾ・ソプラノとしてはちょうど声が安定し、これからキャリアを切り開いていく時期ではないだろうか。オペラではヴェルディ《トロヴァトーレ》のアズチーナや《ボリス・ゴドノフ》の居酒屋のおかみ（この役では2006年に大野和士指揮でモネ劇場にも出演している）、ポンキエルリ《ジョコンダ》のラウラなどを歌っているが、特筆されるのはロシア音楽のコンサート作品に数多く出演していることである。

今回出演するプロコフィエフ《アレクサンドル・ネフスキー》や《イワン雷帝》はダニエル・ガッティやユーリ・テミルカノフとも共演、2003年にはレナード・スラットキン指揮のもと、BBCプロムスでも《イワン雷帝》を歌っている。ほかにはブラームス《アルト・ラプソ

ディー》、ヴェルディの《レクイエム》、《第9》のソリストとしても活躍している。そして来年には、松本のサイトウ・キネン・フェスティバルで《スペードの女王》の家庭教師役として小澤征爾と共演することが決まっている。

(石戸谷結子)

合唱 chorus

東京混声合唱団

TOKYO PHILHARMONIC CHORUS



1956年、東京芸術大学声楽科卒業生によって創設され、2006年に創立50周年を迎えた「東混」の活動を語る上で最も欠かせないものが、その広範なレパートリーだろう。グレゴリオ聖歌からルネサンス、古典派、ロマン派、シェーンベルク、クセナキス、リゲティに加え、故・武満徹、故・柴田南雄、間宮芳生、湯浅譲二、林光、三善晃、新実徳英、野平一郎、西村朗など創立以来行ってきた作曲家への活発な委嘱活動によって生まれた179を超える新作が含まれ、1月の定期公演（大谷研二指揮）では、新実徳英、西村朗の委嘱作品、2月の定期公演（山田和樹指揮）にも、上田真樹、鷹羽弘晃への委嘱作品が初演される予定。未来の財産の開拓に果たす東混の業績は多大なものがある。

現在、年6回の東京での定期演奏会と大阪、名古屋、岐阜での定期公演、各地での特別演奏会、教育活動、録音等、幅広く活動している。

海外公演は79年のASEAN5か国公演を皮切りに、87年アメリカ8都市公演（創立30周年記念／文化庁派遣）、97年の世界合唱連合（ユネスコ国際音楽協議会合唱部門）の招きで渡欧したスウェーデン、ベルギー（創立40周年記念）、2000年のエストニア、フィンランド（国際音楽祭）、2002年カ

ナダの国際合唱祭に出演。2006年はヨーロッパ公演（創立50周年記念。バルト国際合唱祭出演）を行った。

指揮者には、田中信昭（桂冠指揮者）、ヨーロッパ各地のオペラ劇場で活躍するヴォルフディーター・マウラー（首席客演指揮者）、松原千振（常任指揮者）、大谷研二（指揮者）、そしてコンダクター・イン・レジデンスには実力派の若手・樋本英一、宮松重紀、森口真司、山田和樹が揃い、ますます充実したプログラミングや教育活動が期待される。N響正指揮者だった故・岩城宏之氏は東混音楽監督も長らく務め、氏の最後の指揮となったのが「東京混声合唱団創立50周年記念アニヴァーサリーコンサート」（2006年5月24日）であった。

96年から日本を代表する芸術団体として文化庁から「特別重点支援団体」に指定される。文化庁芸術祭大賞、音楽之友社賞、毎日芸術賞、京都音楽賞、創立20周年企画「合唱 音楽の領域」によるレコード・アカデミー賞などを受賞。

録音は多数あり、50周年記念の最新録音「懐かしいアメリカの歌」（新実徳英、湯浅譲二作品、東京混声合唱団愛唱曲〔若林千春編曲〕）が2006年10月フォンテックからリリースされた。

（小倉多美子）

モーツァルト

交響曲 第35番 二長調 K.385「ハフナー」

ウォルフガング・アマデウス・モーツァルト(1756-91)の交響曲は、この《第35番》以降、「3大交響曲」を含む最後の6曲がウィーン時代の作品である。それまでの創作を総決算するような充実した作品群は、周知の通り交響曲史の1つの頂点を形作っている。

ウィーンに移った翌年の1782年夏、モーツァルトは多忙の合間を縫ってセレナード風の祝祭音楽をまとめた。ザルツブルクのジークムント・ハフナー(子、1756-87)の爵位授与を祝うためであった。この《ハフナー》を、モーツァルトは翌83年に再び手がける。当初含まれていた行進曲ははずされ、おそらく2つあったメヌエツが1つに減らされて、現在の4楽章構成となった。

この交響曲は同年3月23日にウィーンのブルク劇場で開催されたモーツァルトの自作品の演奏会で、皇帝ヨーゼフ2世臨席のもとで演奏された。この演奏会については、モーツァルトの3月29日の父宛の手紙に詳細なプログラムが記されており、そこからは当時この種の催しがどのようなものであったのかが想像できる。最初の演目がこの「新ハフナー交響曲」であり、そこではおそらく最初の3つの楽章のみが演奏された。

第1楽章アレグロ・コン・スピリト(4/4拍子)は、モーツァルトの言葉では「情熱的」

な楽章。ゆるやかな**第2楽章**アンダンテ(ト長調 2/4拍子)に、メヌエツ楽章である**第3楽章**(ニ長調—イ長調 3/4拍子)が続いた。

「できるだけ速く」演奏されるべき**終楽章**プレスト(ニ長調 2/2拍子)は第10番目、この日の最後の演目であった。この間の8つの演目としてはオペラのアリア、ピアノ協奏曲、独唱、即興演奏など多様な音楽が配された。延々と続くプログラムのなかで最初と最後を飾ったこの交響曲からは、当時のウィーンの音楽享受の場の雰囲気伝わってくるようである。演奏会は大成功であった。

作曲年代：1782年7月

初演：1782年夏、ザルツブルク、1783年3月23日、ウィーン

楽器編成：フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ1、弦楽

(小岩信治)

ベルリオーズ

叙情的情景「クレオパトラの死」

《クレオパトラの死》はフランスの作曲家エクトル・ベルリオーズ(1803-69)がローマ賞コンクールの本選のために作曲したカンタータで、エジプトの女王クレオパトラがアクティウムの海戦で敗れた後、毒蛇に身を噛ませて死ぬ場面を描いている。

ローマ賞コンクールの作曲部門は1803年に制定されたもので、フランス学士院の芸術アカデミーが管轄していた。コンクールの優勝者は奨学金を与えられてローマに留学する決まりだった。コンクールは2段階選抜方式で行われ、本選に進んだ参加者は審査会場で缶詰状態で課題歌詞に基づくカンタータを作曲することになっていた。

ベルリオーズは1826年からローマ賞コンクールに参加し、1830年、5度目の正直でようやくカンタータ《サルダナパル》により大賞を受賞したが、その間、彼は毎年ローマ賞コンクールを受け続けていた。最初の年は予備審査で落選したため、カンタータを作曲する段階まで進めなかったが、1827年からは毎年本選に進んだので、全部で4曲のローマ賞カンタータが残されている。

《クレオパトラの死》はローマ大賞受賞の前年1829年の作である。1828年のローマ賞コンクールで、カンタータ《エルミニ》により2等賞を受賞していたベルリオーズは、翌29年のコンクールでは自信満々で試験会場に入り、19日間でカンタータ《クレオパトラの死》を完成させた。

ところが、ベルリオーズは張り切るあまりに、コンクールの枠をはみ出してしまった。この作品には、大胆な和声といい、独特なリズムといい、ベルリオーズの才能が十分に

発揮されているが、アカデミズムの総本山である芸術アカデミーの許容範囲に収まるものではなかったのである。結局、ベルリオーズは何の賞も受けられず、この年は大賞自体出ないという事態になってしまった。審査の後、ベルリオーズは道で出会った審査員の1人ボアエルデューに「君は賞を手にしていただけに、それを捨ててしまった」と言われたという。翌年、ベルリオーズはオーベールの勧めに従って「ぞっとするほど平板」に課題カンタータを作曲して、首尾よく大賞を受賞することになる。

《クレオパトラの死》はローマ大賞こそ逃したものの、この時期までに書かれたベルリオーズの作品のなかでもっとも円熟した作品であり、現在でも演奏される彼の唯一のローマ賞カンタータである。ピエール・ヴィエイヤール作の歌詞は2組のレシタティーヴとアリアという構成であるが、ベルリオーズはむしろ一続きのモノログとして捉えて作曲している。

作曲年代：1829年7月4～23日

初演：1829年8月1日(ローマ賞最終審査会、ただし、その前日に音楽セクションでの予備審査が行われた)クララ・ルルー(独唱)とピアノ伴奏による

楽器編成：フルート2(ピッコロ2)、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、ティンパニ1、弦楽、メゾ・ソプラノ・ソロ

(井上さつき)

ベルリオーズ 叙情的情景「クレオパトラの死」から歌詞対訳
Berlioz “La mort de Cléopâtre”, scène lyrique

訳・井上さつき
Translation: Satsuki Inoue

CLÉOPÂTRE

RECITATIVE

C'en est donc fait! Ma honte est assurée
veuve d'Antoine et veuve de César,
au pouvoir d'Octave livrée,
je n'ai pu captiver son farouche regard.
J'étais vaincue, et suis déshonorée.

En vain, pour ranimer l'éclat de mes attraits,
j'ai profané le deuil d'un funeste veuvage;
En vain, en vain de l'art épuisant les secrets,
j'ai caché sous des fleurs les fers de l'esclavage;
Rien n'a pu du vainqueur désarmer les
décrets.

A ses pieds j'ai trainé mes grandeurs opprimées.
Mes pleurs même ont coulé sur ses mains
répandus,
et la fille des Ptolémées
a subi l'affront des refus.

Ah! qu'ils sont loin ces jours, tourment de
ma mémoire,
où sur le sein des mers, comparable à
Vénus,
d'Antoine et de César réfléchissant la

クレオパトラ

レシタティーヴ

もうおしまいだわ! 必ず屈辱を受けることになる。
アントニウスとカエサル[シーザー]の寡婦である私は、
オクタヴィウス[カエサルの養子]の力にゆだねられるのだ。
彼の残忍なまなざしを虜にすることはできなかった。
負けたわ。私は名誉を傷つけられる。

自分の色香の輝きを よみがえらせようと、
夫の喪に服する期間を汚したが、無駄だった。
手管の限りをつくしても 無駄だった。
花のかげに奴隷の鉄鎖を隠したが、
勝利者の決意を弱めることは
できなかった。

私は彼の足元に崩れかけた尊厳を 引きずっていった。
私の涙さえ彼の広げた手の上に
流れたわ。
そしてプトレマイオスの娘[クレオパトラ]は
拒絶という侮辱を受けたのよ。

ああ、私の記憶にある日々は
遠くなってしまった。
あのときは海のただなかに立つ、
ヴァーナスのごとく、
アントニウスとカエサルの栄光は

gloire,
j'apparus triomphante aux rives du
Cydnus!

Actium m'a livrée au vainqueur qui me
brave;
Mon sceptre, mes trésors ont passé dans
ses mains;
Ma beauté me restait, et les mépris
d'Octave,
pour me vaincre ont fait plus que le fer des
Romains.

Ah! qu'ils sont loin ces jours, *etc.*

En vain de l'art épuisant les secrets, *etc.*
Mes pleurs même ont coulé sur ses mains
répandus.
J'ai subi l'affront des refus.
Moi! ... qui du sein des mers, comparable
à Vénus,
M'élançai triomphante, m'élançai triomphante
aux rives du Cydnus!

Au comble des revers, qu'aurais-je encor
à craindre?
Reine coupable, que dis-tu?

反映しつつ、
私はキュドニスの川岸に
勝ち誇って姿を現したわ!

アクティウム[の海戦]はこの身を、挑んできた勝利者に
引き渡した。
私の王杖や財宝は
彼の手に渡った。
私の美しさは残ったが、私を打ちのめす
オクタヴィウスの軽蔑は
ローマ人の刃にも
まさるものだった。

ああ! 私の記憶にある日々は遠くなってしまった、(繰り返し)。

手管の限りをつくしても無駄だった、(繰り返し)
私の涙さえ彼の広げた手に
流れた。
私は拒絶という侮辱を受けた。
私! ... ヴィーナスのごとく
海のただなかから、
勝ち誇って立ち現れた、勝ち誇って
キュドニスの川岸に立ち現れたのに!

不運のどん底で、今さら何を
恐れようか?
罪ある女王よ、何を言うのか?

Du destin qui m'accable est-ce à moi de
me plaindre?

Ai-je pour l'accuser les droits de la
vertu?

J'ai d'un époux déshonoré la vie.
C'est par moi qu'aux Romains l'Égypte est
asservie,

Et que d'Isis l'ancien culte est détruit.
Quel asile chercher? Sans parents, sans
patrie,

il n'en est plus pour moi que l'éternelle
nuit!

MÉDITATION

("How if when I am laid into the tomb..."
—Shakespeare)

Grands Pharaons, nobles Lagides,
verrez-vous entrer sans courroux,
pour dormir dans vos pyramides,
une reine indigne de vous?

Non! ... non, de vos demeures funébres
je profanerais la splendeur.

Rois, encor au sein des ténèbres,
vous me fuiriez avec horreur.

自分を打ちのめした運命を
嘆くというのか?

それを非難できるような
美徳の権利を私はもっているのか?

私は夫の生涯を台無しにしてしまった。

私のせいでエジプトはローマ人に
屈服した。

そして、いにしへのイシス(古代エジプトの女神)崇拜は壊された。
どんな隠れ家を探そうというのか? 両親もなく、
祖国もないのに。

私にあるのは永遠の
夜ばかり!

瞑想

(「では、もし納骨堂に入れられたあとで…」[シエイクスピア「ロミオとジュリエット」より])

偉大なるファラオよ、高貴なるラジドよ、
お怒りにならずにごらんになりますか、
あなたがたのピラミッドの中で眠るために、
不実な女王が入ってくるのを?

否!…否、あなた方の墓所の栄光を
私はふみにじってしまうでしょう。

王よ、なお闇のただなかにある方よ、
あなた方は憎しみをもって私を避けるでしょう。

Du destin qui m'accable est-ce à moi de
me plaindre?

Ai-je pour l'accuser, ai-je le droit de la
vertu?

Par moi nos Dieux ont fui d'Alexandrie.
D'Isis le culte est détruit.

Grands Pharaons, nobles Lagides,
vous me fuiriez avec horreur.

Du destin qui m'accable est-ce à moi de
me plaindre?

Ai-je pour l'accuser, ai-je droit de la
vertu?

Grands Pharaons, nobles Lagides, *etc.*

Non, j'ai d'un époux déshonoré la vie.

Ses cendres sont sous mes yeux,
son ombre me poursuit.

C'est par moi qu'aux Romains l'Égypte
est asservie.

Par moi nos Dieux ont fui les murs
d'Alexandrie,
Et d'Isis le culte est détruit.

Osiris proscrit ma couronne.

A Typhon je livre mes jours!

私を打ちのめした運命を
嘆くというのか?

私はそれを非難するのだろうか、私に美徳の権利が
あるのだろうか。

私のせいでわれらの神々はアレクサンドリアから逃げ去った。
イシス崇拝は壊された。

偉大なるファラオよ、高貴なるラジドよ、
あなた方は憎しみをもって私を避けるでしょう。

私を打ちのめした運命を
嘆くというのか?

私にそれを非難する美徳の権利が
あるのだろうか。

偉大なるファラオよ、高貴なるラジドよ、(繰り返し)

否、私は夫の生涯を台無しにしてしまった。

彼の遺灰は私の目の前にあり、
彼の影が私につきまとう。

私のせいでエジプトはローマ人に
屈服した。

私のせいで、神々は
アレクサンドリアの町を逃れた。
そして、イシス崇拝は壊された。

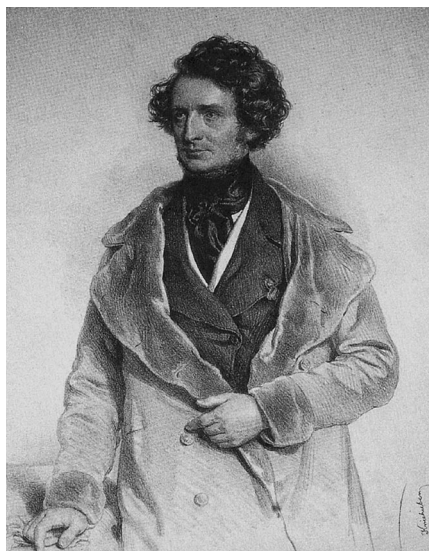
オシリス(エジプト神話の幽界の王、イシスの夫)は私を王国から追放した。

テュポーン(エジプト神話の悪と夜の神)に私は生命を委ねるわ!

Contre l'horreur qui m'environne
un vil reptile est mon recours.

Dieux du Nil, vous m'avez trahie!
Octave m'attend à son char.
Cléopâtre en quittant la vie
Redevient digne de César!

ベルリオーズ



私をとりまく恐怖に対して
卑しいヘビが私の最後の手段なのだ。

ナイルの神々よ、あなた方は私を裏切った!
オクタヴィウスは戦車で私を待ちうけている。
クレオパトラはこの世を離れて
再びカエサルにふさわしくなるのよ!

下は、指揮をするベルリオーズのカリカチュア。
人気や話題となることが多い程、風刺画は多く、
ベルリオーズにもさまざまなカリカチュアが残さ
れている。



サン・サーンス

歌劇「サムソンとデリラ」作品47～
デリラのアリア「あなたの声に心は開く」

《サムソンとデリラ》はカミーユ・サン・サーンス(1835–1921)の3幕からなるオペラで、旧約聖書の「士師記」にもとづき、フェルディナン・ルメールのフランス語台本による。

舞台は紀元前のパレスティナのガザで、ヘブライ人の勇士サムソンは、ペリシテ人に対する反乱の先頭に立っているが、美女デリラの誘惑に負け、力の源である髪を切られ、目をつぶされてしまう。しかし、サムソンは最後の奇跡を祈って自分の命を投げ出し、ダゴン神殿をこわし、多数のペリシテ人を道連れにして死んでいくというあらすじである。

今でこそ《サムソンとデリラ》はフランス・オペラの代表作の1つとして知られているが、このオペラは完成するまでに、またフランス本国で受け入れられるまでに、長いみちのりがあった。サン・サーンスは当初、《サムソンとデリラ》をオペラではなくオラトリオの形で書こうと思っていたが、台本作者のルメールにオペラの方がよいと説得されて変更し、1868年から作曲にとりかかった。第2幕から書き始めたサン・サーンスは1874年にはこの幕のプライベートな試演会まで行ったが、当時のフランスでは聖書の物語を題材にしたオペラを上演してくれるような劇場はなく、サン・サーンスはオペラの完成をあきらめかけた。そこへ救いの手を差し伸べたのがフランツ・リストである。完成したらワイマールの劇場で上演するからとリスト

に励まされたサン・サーンスは気を取り直してオペラを完成させ、1877年ワイマールでの初演が実現したのである。初演は大成功を収め、このオペラは各地で上演されるようになったが、フランスで真価が認められたのは遅く、フランス初演は地方都市のルーアンで、しかもワイマールでの初演から12年も後に行われた。パリのオペラ座で上演されたのはさらに遅く、1892年が最初だったが、それ以降はレパートリーの1つとして定着した。

デリラの「あなたの声に心は開く」は第2幕で歌われる有名なアリア。変ニ長調、3/4拍子、アンダンティーノの官能的なこのアリアで、デリラはサムソンの心をとろけさせる。実際のオペラでは、アリアの間にサムソンからデリラへの愛の告白が挿入される。このオペラのなかでもっとも美しい部分として知られるアリアである。

作曲年代：1868～77年

初演：1877年12月2日、ワイマール大公歌劇場(ドイツ語)
1890年3月3日、ルーアン歌劇場(フランス語)

楽器編成：フルート2、オーボエ2、イングリッシュホルン1、クラリネット2、バス・クラリネット1、ファゴット2、ホルン4、コルネット1、トロンボーン3、ティンパニ1、ハープ1、弦楽、メゾソプラノソロ

(井上さつき)

サン・サーンス 歌劇「サムソンとデリラ」から歌詞対訳

Saint-Saëns from “Samson et Dalila”

訳・井上さつき
Translation: Satsuki Inoue

DALILA

Mon cœur s'ouvre à ta voix,
comme s'ouvrent les fleurs aux baisers de
l'aurore!
Mais, ô mon bien-aimé, pour mieux sécher
mes pleurs,
que ta voix parle encore!
Dis-moi qu'à Dalila tu reviens pour jamais!
Redis à ma tendresse
les serments d'autrefois,
ces serments que j'aimais! . . .
Ah! Réponds à ma tendresse,
verse-moi,verse-moi l'ivresse,
réponds à ma tendresse.
Ah! Verse-moi l'ivresse!

Ainsi qu'on voit des blés les épis onduler
sous la brise légère,
ainsi frémit mon cœur, prêt à se consoler,
a ta voix qui m'est chère!
La flèche est moins rapide à porter le trépas,
que ne l'est ton amante à voler dans tes bras!
Ah! Réponds à ma tendresse!
Verse-moi l'ivresse!
Samson! Samson! Je t'aime!

デリラ

あなたの声^{こゑ}に心は開く
夜明けの口づけに花が開くように!
でも いとしいあなた、私の涙を乾かすために
もっとお声を聞かせて!
デリラに、戻って来ると言って!
もう一度言って、
昔の誓い、
私が好きだったあの誓いのことばを!
ああ! 私の愛に答えて!
酔わせてください!
私の愛に答えて
ああ! 酔わせてください!

小麦の穂先が
風にそよぐように
私の心も震えます、
大切なあなたの声に慰められて!
死をもたらず矢も
恋人があなたの胸に飛び込むほど早くはないわ!
ああ、私の愛に答えて!
酔わせてください!
サムソン! サムソン! 愛しているわ!

サン・サーンス

交響曲 第3番 ハ短調 作品78

フランス近代の代表的な作曲家であるカミーユ・サン・サーンス(1835-1921)はさまざまな分野に多くの作品を残したが、交響曲も例外ではなく、以下のように、番号のついた交響曲を3曲、番号なしの交響曲を2曲残した(他に未完の交響曲が3曲ある)。

交響曲 イ長調

1850年作曲

交響曲 第1番 変ホ長調 作品2

1853年作曲 1853年サン・セシル協会コンサートで初演(指揮スゲール)

交響曲 ヘ長調「首都ローマ」

1855-56年作曲 1857年パドルー管弦楽団により初演

交響曲 第2番 イ短調 作品55

1859年作曲 1859年パドルー管弦楽団により初演

交響曲 第3番 ハ短調 作品78

1885-86年作曲 1886年ロンドンで初演

このなかで、現在、一般的なレパートリーに入っている作品は《第3番》だけだが、サン・サーンスは1850年代のフランスで交響曲を書き続けた希有な存在であり、彼の活動が1880年代以降のフランス音楽の黄金時代につながったのである。

《交響曲第3番》は、ロンドン・フィルハーモニー協会の委嘱で1886年作曲され、同年5月のロンドン初演も、翌年のパリ初演も

成功を博した。パリ初演の折、この曲に感激したグノーは、指揮台を降りて楽屋に戻るサン・サーンスを見て「フランスのベートーヴェンが行く!」と叫んだという。

「オルガン付き」というニックネームがついていることから分かるように、この曲の楽器編成にはオルガンやピアノが加えられているのが特徴の1つで、サン・サーンスの精妙な管弦楽法によって、華麗で繊細な音の世界が広がっている。

この作品には「F.リストの思い出に」という献辞が添えられている。フランツ・リストはサン・サーンスのオルガニスト、ピアニスト、作曲家としての才能を早くから認め、1877年歌劇《サムソンとデリラ》のワイマールでの世界初演を助けた。一方、サン・サーンスは長年にわたりリスト作品の紹介に尽力した。《交響曲第3番》を献呈したいというサン・サーンスの申し出に対してリストは喜び、1886年6月19日付けでワイマールからサン・サーンスに次のような手紙を送っている「このようなあかしをご親切にも私に与えて下さって感謝しています。交響曲のロンドンでのご成功をととも喜んでます。パリでもほかの場所でもその成功はクレシェンドしつづけるでしょう(…)」。しかし、リストは、その6週間後の7月31日に世を去ったため、出版譜を手にすることはできなかった。リストの

訃報を聞いたサン・サーンスは「F.リストの思い出に」という献呈の辞に差しかえ、この作品を出版したのである。

曲は2楽章構成だが、内容的にはそれぞれの楽章が通常の2つの楽章をまとめた形をとっている。全曲を通じて循環主題が随所に、しかも緻密に用いられており、作品の構築性を高めている。

第1楽章 第1部 アダージョ——アレグロ・モデラート ハ短調 6/8拍子、序奏つきの自由なソナタ形式。11小節の序奏の動機のなかには、すでに第1主題が内包されている。アレグロ・モデラートの主部は、16分音符で刻まれて始まる第1主題と、その一部から派生した変イ長調の循環主題が提示された後、甘美な第2主題が変ニ長調で現れる。第1主題と循環主題を素材にした展開部に続いて、ほぼ型どおりの再現部となり、しだいに静まる。

第1楽章 第2部 ポーコ・アダージョ 変ニ長調 4/4拍子 3部形式。オルガンに導かれて、弦楽器のユニゾンが甘美な主要主題を奏でる。

第2楽章 第1部 アレグロ・モデラート ハ短調 6/8拍子——プレスト ハ長調——アレグロ・モデラート——プレスト 変イ長調。スケルツォ的な部分で、アレグロ・モデラートとプレストの2つの部分からなってい

る。

第2楽章 第2部 マエストーソ ハ長調 6/4拍子——アレグロ ハ長調 2分の2拍子。序奏つきの自由なソナタ形式。オルガンのハ長調の主和音の強奏が鳴り響くなか、荘厳な主題が対位的に扱われ、続いて、循環主題がピアノの分散和音を伴って現れる。やがて、アレグロでは、循環主題をもとにした第1主題と、表情豊かな第2主題、さらに序奏部の主題を中心に壮大に展開し、最後はハ長調の主和音の上に全曲が華々しく閉じられる。

作曲年代：1885～86年

初演：1886年5月19日、ロンドンのセント・ジェームズ・ホール。作曲者自身の指揮するロンドン・フィルハーモニー協会管弦楽団によって

楽器編成：フルート3(ピッコロ1)、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン1、クラリネット2、バス・クラリネット1、ファゴット2、コントラファゴット1、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ1、ティンパニ1、トライアングル、シンバル、大太鼓、オルガン1、ピアノ2(連弾)、弦楽

(井上さつき)

ラヴェル

優雅で感傷的なワルツ

《優雅で感傷的な》という題は、シューベルトのワルツ集に由来する。ワルツはラヴェル(1875-1937)が生涯愛し続けた舞曲であり、後年の《ラ・ヴァルス》(1920)にもその例をみることができる。《優雅で感傷的なワルツ》の原曲はピアノ曲であるが、ラヴェル自身により管弦楽用に編曲され、バレエ音楽《アデライード、あるいは花言葉》として初演された。ピアノ版の初演は、作曲者の名をふせて演奏するという珍しい形で行われたが、ラヴェルの作品とわかった聴衆はかろうじて半数を超える程度であったという。ラヴェルはこの作品で、以前の作品にも増して硬質な和声と、簡潔で透明な書法を試みたと述べている。それは、《夜のガスパール》(1908)などにおける技巧的で豊かな響きを耳にしていた当時の聴衆には、異質な響きであったのだろう。

全体は8曲のワルツから成り、序曲のような開始部に、さまざまな特徴を持つワルツが続き、最終曲でそれらが静かに回想される。1曲目は、3拍目にアクセントのあるワルツで始まり、弱奏から強奏へ勢いよく膨れ上がる、生き生きとした序となっている。2曲目は雰囲気が一転し、フルートを中心とした木管のソロによる穏やかな旋律が、オーケストラの薄い響きと共に静かに奏される。3曲目はオーボエによる民謡風の軽やかな旋

律が印象的なワルツ。4曲目では付点リズムの旋律が、複調的な響きの上で優雅に奏される。5曲目は、シンコーペーションを伴う旋律に、2小節毎に奏法の変わる弦が精妙な響きを与え、6曲目では3/2拍子と3/4拍子の1小節ごとの交代が、ワルツのリズムに微妙なゆれを与える。ラヴェル自身が最も特徴的であると述べた7曲目は、全体のクライマックスにあたり、複調的な弱奏から、イ長調の総奏へ決然と高まる。8曲目はエピローグと題され、抑制された音量のなか、それまでのワルツを断片的に回想し、消え入るように静かに終わる。

作曲年代：1912年(原曲のピアノ版は1911年)

初演：1912年4月22日パリ、シャトレ座(ピアノ版初演は1911年5月9日パリ、ガヴォー・ホール)

楽器編成：フルート2、オーボエ2、イングリッシュホルン1、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、テューバ1、ティンパニ1、大太鼓、シンバル、トライアングル、小太鼓、タンブリン、ハープ2、チェレスタ1、ジュ・ドゥ・タンブル1、弦楽

(関野さとみ)

ラヴェル

左手のためのピアノ協奏曲 二長調

1929年から31年にかけて、ラヴェルは生涯で初めてのピアノ協奏曲を同時に2つ作曲した。その1つが、《左手のための協奏曲》である。第1次世界大戦で右腕を失ったピアニスト、ヴィトゲンシュタインからの依頼を受けたラヴェルは、片手という特殊な技術上の制約にかえて意欲を刺激され、先に着手していた二長調の協奏曲と並行して作曲を進めた。《左手のための…》は、軽快な明るさに満ちたもう一方の協奏曲とは対照的な、劇的で重厚な表現を備えており、ヴィトゲンシュタインは難易度が高すぎるとして、ピアノ・パートを修正して初演を行った。以後のラヴェルは脳疾患の症状が悪化し、これらの協奏曲がピアノを交えた最後の作品となったが、いずれも今日までピアノ協奏曲の最も優れたレパートリーに数えられる。《左手のための…》には、とりわけ中間部にジャズの要素が存分に活かされているが、それは1928年の、アメリカへの演奏旅行で触発されたものであった。新しい様式を積極的に取り入れた背景には、ラヴェルの、片手のみによる演奏の効果に独創性をもたせようとする意図を窺うことができる。

1楽章形式だが、全体は対比的な3つの部分から成る。冒頭はレント 3/4拍子、低音による不安な導入に始まり、低音の木

管が2種類の主題を奏する。総奏へ達した後、独奏ピアノが登場し、片手という概念を払拭させるような、技巧的で華麗なカデンツァが奏される。中間部はアレグロ 6/8拍子、行進曲風の無骨な旋律が雰囲気を一転させた後、冒頭の主題がジャズ風に、時にアドリヴのように聴こえながらファゴットからさまざまな楽器へ受け渡される。最終部分はレント 3/4拍子、総奏によって冒頭部分が再現された後、ピアノの流麗なカデンツァがそれまでの旋律を回想し、激しい盛り上がりを迎えて閉じる。

作曲年代：1929～30年

初演：1932年1月5日ウィーン、ヴィトゲンシュタインのピアノ独奏、楽友協会ホール

楽器編成：フルート3(ピッコロ1)、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン1、クラリネット2、Esクラリネット1、バス・クラリネット1、ファゴット2、コントラファゴット1、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ1、ティンパニ1、トライアングル、小太鼓、シンバル、大太鼓、ウッドブロック、タムタム、ハープ1、弦楽、ピアノ・ソロ

(関野さとみ)

チャイコフスキー

交響曲 第6番 口短調 作品74「悲愴」

チャイコフスキーは、《交響曲第4番》(1877)以後、たえず交響曲新作を試み挫折した。88年に《第5番》を完成。90～93年には少なくとも2つの交響曲を進め、旋律断片と謎めいたプログラム、そして4つの楽章のおおまかなスケッチ(一部をオーケストレーションした第1楽章は《ピアノ協奏曲第3番》に利用)を残した。当時の彼はロシア皇帝の庇護と内外での自作人気に満足しながらも、13年来のパトロン(メック夫人)からの別れの手紙と親族や知友のあいつぐ死などで酒が手放せない。だが93年2月に始めた《交響曲第6番》には熱狂する。かつて《交響曲第4番》の内容を詳しく綴った彼も——新交響曲に神秘性をこめたかったのか——その進捗状況を少数の親族に伝えたただけだった。スケッチは第1、3、4、2楽章の順に2月4日～3月24日のうち、実質ほぼ3週間で完成。ケンブリッジ大学名誉博士号授与式出席をかねた英国指揮旅行(6月1*～13日*)の後、7月20日オーケストレーションを始めた。8月19日に総譜を終えるが(日記の記述から)、8月11日には新作初演(10月16日)を承諾している。チャイコフスキーは9月7日*ハンブルクで自作オペラ《イヨランタ》(マーラー指揮)に感動して帰宅。10月7日クリンの自宅を発って10日にペテルブルクへ着き、16日に新交響曲初演を指揮

した(なおサラジェフは10月8日または9日のモスクワ音楽院非公式初演を伝えている)。

各楽章は調性を除けば構成と形式などが独創的なゆえ、18日付けの新聞は「外国旅行の影響下で書かれた」(『新時代』)「優雅……インスピレーションは他の交響曲に劣る」(『ペテルブルク新聞』)「第4楽章は最高」「アレグロ楽章のしあげはまずい」(『ペテルブルク報知』)などと論評。「音楽家連には不評」(グラズノフ)「深く感動した」(リヤードフ)「作曲者の解釈には不満」(弟子グレチャニノフ)と楽友の感想もさまざまだった。チャイコフスキーは夏頃から考えていた題名《悲愴》を書き添え、総譜を出版社(ユルゲンソン)に送付。(僕のどの子(筆者注：自作の意)よりも愛する)(93年8月2日)新作を熱愛する甥ウラディールに捧げた。作曲者は25日(初演の9日後)にコレラで急逝。15年前にピアノ曲集《こどものアルバム》を贈られたこの美しい甥も、1906年12月に自殺する(享年35歳)。創作当時のチャイコフスキーの心情を反映するような《第6番》は、まずその悲劇性で人々の記憶に残ることになる。

第1楽章 アダージョ—アレグロ・ノン・トロツポ 口短調 4/4拍子。354小節。18小節

の導入部と主部(2つの主題をもつソナタ形式)からなり、全体でもっとも長く重要な楽章。提示部142小節と展開部144小節、30小節ほどの再現部にコーダが続き、201～207および208～214小節で、死者を讃えるロシア正教会賛歌《おおキリストよ、聖人らとともに……》が響く。悲しみとあきらめに満ちた死の戦いは、コーダで救いの希望に変わり曲を閉じる。

第2楽章 アレグロ・コン・グラチア ニ長調 5/4拍子。ABA'コーダ。178小節。すでに《歌曲集》作品57-5(84)で、「死=戦いも苦悶もない深い安らぎ」の想いをワルツ化しており、《悲愴》でも美しく安らかな死を描く。なお93年4月作の《ピアノ曲集》作品72-16も5拍子のワルツ。5/4拍子はグリンカ(オペラ《皇帝にささげた命》[34～36]の「婚礼の合唱」)以来、ボロディン(オペラ《イーゴリ公》[69～87]の「女声合唱」)やムソルグスキー(《展覧会の絵》[74]の「プロムナード」ほか)、そしてチャイコフスキーのワルツに受け継がれた。冒頭のチェロ(2+3)と木管とホルンの伴奏(3+2)など、5拍子の多様な表情を見事に描きわけている。

第3楽章 アレグロ・モルト・ヴィヴァーチェ ト長調 12/8拍子。347小節。ABA'B'コーダ。動機素材を厳格に展開させたタ

ランテラ風のA(12/8拍子：ト長調)、スケルツォ動機を発展させた行進曲B(4/4拍子：ホ長調)からなる。凱進行進のような輝きにも不吉な暗さが伴う。

第4楽章 アダージョ・ラメントーソ 口短調 3/4拍子。ABA'コーダ。171小節。口短調のAとその平行長調(ニ長調)のBは、ともに下降2度の単純な音型をいかに、和声と楽器編成ほかで多彩に変化させる。

作曲年代：1893年2月4日～8月19日

初演：1893年10月16日ペテルブルク、作曲家自身の指揮

楽器編成：フルート3(ピッコロ1)、オーボエ2、クラリネット2(バス・クラリネット1)、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、テューバ1、ティンパニ1、大太鼓、シンバル、タムタム、弦楽

〈 〉はチャイコフスキーの書き言葉。*のない日付は旧ロシア暦(1900年2月28日前の日付には12日を加えると西暦になる)。

(伊藤恵子)

プロコフィエフ 古典交響曲 二長調 作品25

プロコフィエフ(1891-1953)は1908年夏最初の《交響曲 ホ短調》を書いた。恩師グラズノフの温情で実現した試験的演奏で、作曲者はオーケストレーションの稚拙さを痛感。以後は学生オーケストラを指揮しながら交響曲の名作を調べ、主にピアノの小品で個性を磨いていく。そしてチェレプニンに学んだ古典派の音楽語法を、《ピアノ曲集》作品12(1906~13年完成:「ガヴォット」「アルマンド」ほか)で、その後に交響曲で試みた。17年夏の数か月、首都近郊で——革命騒ぎをよそに——若者らしい実験を始める。ピアノを使わず記憶とイマジネーションだけによる交響曲の創作。さらにハイドンが今生きていたら創造したはずの、新しい音楽スタイルの模索である。トロンボーンを除いた小編成のオーケストラと、簡潔で舞曲風の伝統的な4つの楽章。ほぼすべての主題素材はベートーヴェン以前のそれを模倣し、はぎれよく親しみやすい旋律と明確なカデンツァ、音階的またアルペッジョ風の音型、エレガントな装飾音を使う。独奏楽器の純粹な音色(フルートのトリル、ヴァイオリンのスピッカートなど)と、ピアノからフォルティッシモ(総奏)への突然の移行に、遊びの精神と皮肉まじりのユーモアが漂う。「古きよき時代」をめざした簡潔なスタイルには、前作《スキタイ組曲》(14~15)の

過激さはない。とはいえ頻繁な直裁的転調、辛辣な和声対比、リズムの変換や旋律跳躍などは——ピアノ曲集《つかの間の幻影》(15~17)と同じく——20世紀の息吹を伝える。第1~3楽章は16年にスケッチ済みだが、第4楽章は試行錯誤の連続で8月28日にスコアを完成。古典的名作になってほしいという願いをこめて《古典》と名づけた。なお同時期には《ヴァイオリン協奏曲 第1番》《つかの間の幻影》などの名作が生まれている。

初演は18年4月21日(ペトログラード)。作曲者自ら旧宮廷楽団を指揮し、当時親しかったアサフィエフに捧げた。《古典》の静穏な叙情性と明晰さには、反対派も「過激な不協和音がない……ハイドンとモーツァルトの若々しいインスピレーションの名残」と好意的だった。初演の数日後、プロコフィエフは新政府の文化責任者ルナチャルスキーと会い、働きすぎたから海の空気をすいたいと伝えた(作家ゴーリキーら同席)。そして18年5月7日《古典》の総譜ほかをたずさえてシベリアへ向かい、日本経由で渡米した。以来《古典》は国外で広く演奏され、ソ連時代も極端なモダニズムを嫌う聴衆から熱い喝采をあげた。後に当惑のあまり《古典》だけで僕を評価してほしくない(33年3月発表)と書く作曲者。すでに25年

2月ストラヴィンスキーの《8重奏曲》(22～23)の終楽章について、プロコフィエフは自身のバッハへの愛を語りながらもバッハの模倣を評価せず、同じ理由で《ピアノと管弦楽のための協奏曲》(23～24)は《春の祭典》(13)などより価値がないと断定。〈《古典》のような模倣的作品はすべて価値が低い〉と綴っていたのである。だがプロコフィエフが《古典》で修得した古い舞曲のリズム、ベートーヴェン前の楽器編成ほかは、彼の個性の一部となり、後にバレエ音楽《ロミオとジュリエット》(35～36)《シンデレラ》(41～44)や《フルート・ソナタ》(42～43)に現れる。

第1楽章 アレグロ ニ長調 2/2拍子。ソナタ形式の短い断章。ニ長調(ハ長調)の第1主題とイ長調の第2主題による。ハ長調の突然の登場やニ長調への自由な回帰が彼らしい。

第2楽章 ラルゲット 3/4拍子。優雅なメヌエット。主部のリズムと和声色彩は彼の《ロミオとジュリエット》の《西インド諸島のどれい娘の踊り》を予感させる。

第3楽章 ノン・トロポ・アレグロ ニ長調 4/4拍子。古典交響曲のメヌエットではなく、古典組曲のガヴォット。オクターヴ跳躍の並行や、突如ニ長調に変わるカデンツァなどが特徴的。

第4楽章 モルト・ヴィヴァーチェ ニ長調 2/2拍子。ソナタ形式。ニ長調の第1主題とイ長調の第2主題による。コーダで典型的なロシア歌謡の旋律(イ長調)を響かせる。

作曲年代：1916～17年

初演：1918年4月21日ベトログラード(現ベテルブルク)。作曲者の指揮による

楽器編成：フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ1、弦楽

〈 〉は作曲者の書き言葉。1918年1月31日までの日付は旧ロシア暦。13日を加えると西暦になる。

(伊藤恵子)

プロコフィエフ ピアノ協奏曲 第2番 ト短調 作品16

プロコフィエフは飛躍の年1911年に、自作の初出版や《ピアノ協奏曲第1番》などでロシア音楽界の注目を集めた。そして13年春に《同・第2番》を書きあげる。《第1番》はオーケストラとピアノを同等に扱い、オクターヴを多用したエネルギー的な1楽章形式。一方ピアノを主役とする新作《第2番》は、4つの楽章で複雑な音楽語法と劇的内容がいっそうめだつ。13年8月23日バヴロフスク(ペテルブルク近郊)で作曲者自ら初演(ヴァルリッヒ指揮)、ピアニストのM.シュミットホーフ(13年自殺した親友)の思い出に捧げた。保守派は野次と怒号をあげせ、評論家では唯1人、カラウイギンが「10年後にヨーロッパ的名声を獲得し……(彼を)全員一致で喝采するだろう」と、その輝かしい未来を予言した。15年3月7日*の国外デビュー(ローマ)でも演奏され、「悪夢」などの酷評をよそに、ストラヴィンスキーらは拍手を惜しまなかった。またディアギレフは第4楽章第2主題などのバレエ化を作曲者に提案。オペラやバレエでの2人の協力が大先輩の死まで続くことになる。

プロコフィエフは23年バイエルンで——総譜は革命騒ぎで紛失——記憶から原曲を復元。オーケストレーションをやりなおし、24年5月8日パリで自ら初演した(クーセヴィツキー指揮)。同地の聴衆は冷淡だったがほどなくソ連初演が続き、ユーディナ(ショスタコーヴィチの楽友：38年の名演で有名)やリヒテルほか、多くの巨匠が愛奏し続けている。なお初版の辛辣な不協和音

と複調志向などは、現在演奏される改訂版で一部削られているようだ。

第1楽章 アンダンティーノ ト短調 4/4拍子。自由ソナタ形式。展開部の劇的な緊迫感に、壮大なカデンツァが続く。

第2楽章 スケルツォ：ヴァイヴァーチェ ニ短調 2/4拍子。トッカータ風のピアノを、極端に単純なリズム(オーケストラ)が支える。

第3楽章 間奏曲：アレグロ・モデラート ト短調 4/4拍子。20年代の彼の表現主義的傾向を予言する。

第4楽章 フィナーレ：アレグロ・テンペスト ト短調 4/4拍子。ロンド。主題の複雑な変奏と、コーダ(ト長調とイ長調の3和音ほか)がめだつ。

作曲年代：1912～13年(1923年改訂)。

初演：1913年8月23日 バヴロフスク。改訂版は1924年5月8日 パリ。いずれも作曲者のピアノによる。

楽器編成：フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ1、ティンパニ1、シンバル、小太鼓、大太鼓、タンブリン、サスペンデッド・シンバル、弦楽、ピアノ・ソロ

〈 〉は作曲者の書き言葉。1918年1月31日までの日付で、*のないものは旧ロシア暦。これに13日を加えると西暦になる。

(伊藤恵子)

プロコフィエフ

カンタータ「アレクサンドル・ネフスキー」作品78

ロシアの支配者賛美はいつの時代も宗教性をおびる。皇帝を救世主として図像化した例は多く、少なからぬ聖職者を投獄し古い貴重な聖堂を閉鎖・爆破させたスターリンも、正教会の支配者賛歌は大好きだった。アレクサンドル・ネフスキー(1220/2~1263:本名ヤロスラヴィッチ)は、キリスト教を国教としたウラディーミル聖公から8代目のリューリク貴族。ロシア史で最も多難な13世紀に、ノヴゴロド公やキエフ大公として、正教会の大国ロシアを基礎づけた。16世紀中頃正教会の聖人と定められ、ピョートル大帝は新都ペテルブルクに彼にちなむ修道院を建立(チャイコフスキーは同院の墓地に眠っている)。同様の勲章(1725年制定:対象は皇族の軍功)は、ソ連時代に復活する。聖俗双方で礼賛されてきた救国の英雄の映画化で、エイゼンシュタインとプロコフィエフという2大芸術家の共同作業が実現した。当時の作曲家はこぞって、スターリンご鼻根のカンタータで社会主義建設などを賛美しており、プロコフィエフも映画音楽から同名のカンタータを完成(22年12月、彼は「カンタータは何か退屈なもの」を連想させる)と書いていたが)。リアリズムと民衆性を志向し創造的個性を発展させた声楽交響曲と、クレムリン幹部から高く評価された。作曲者はカンタータ創作で第5、

7曲のエピソードを本質的に再構成し、全体のオーケストレーションを改訂。機械的なリズム、重々しい金管楽器と打楽器などによる粗野な侵略者(ドイツ騎士団)と、弦楽器とメゾ・ソプラノほかの暖かく柔和な旋律によるロシア人民と、両者を音楽で描きわける。第1~4曲は導入と敵味方の主題の提示、対位的に結びつけられた第5曲が筋の最重要部。叙情的で劇的な間奏曲風の第6曲に、各主題を再現させた第7曲で閉じる。プロコフィエフはエピソードをただ繋げるのではなく——その優れた形式感によって——全7曲に内的論理性をもたせている(ソナタ形式の応用との指摘もある)。初演は39年5月7日モスクワ(映画の封切りは38年12月1日)。約2年後にドイツ軍侵攻が始まり、この作品は戦意高揚の音楽として内外各地でたびたび演奏された(43年3月7日のニューヨーク公演ほか)。そして48年2月ジダーノフ批判をあびた時、プロコフィエフは自己批判をした後、このカンタータや《交響曲第5番》ほかで不健全な要素からの脱却を試みある程度成功したと弁明するのである。なお彼は《キージェ中尉》(33)《イワン雷帝》(42~45/エイゼンシュタイン監督)の映画音楽も書いている。

第1曲 管弦楽序曲。「蒙古人(タタール人)の圧制にあえぐロシア」。もっとも短い。

オーボエとバス・クラリネットのユニゾン(4オクターヴ離れる)が効果的。

第2曲 「アレクサンドル・ネフスキーの歌」。1240年7月15日アレクサンドルのスウェーデン軍撃破とそれをたたえる力強い合唱。ハーブのゲースラ(ロシアの民族楽器)模倣などは、ロシアの古典的用法。

第3曲 「プスコーフの十字軍士」。金管楽器の大音響や、ラテン語賛歌と過激な和声(嬰ハ短調の3和音)などで敵を描く。

第4曲 「めざめよ、ロシア人民」はロシア古来の合唱と行進曲風リズム、彼らしい色彩豊かな転調などを駆使した壮大な愛国歌。ハ短調と変ホ長調の和声を効果的に使う。

第5曲 「氷の上の戦い」。1242年4月5日チュードフ湖でのドイツ騎士団撃破と平和の到来を描く。映画と音楽双方で中心となる。戦闘の場面では両軍の主題がロンド風に交替。ドイツ騎士団の単調なリズムとトランペットに続いて、第3曲の聖歌が同じ嬰ハ短調と同じ声部構成で再現。またロシア軍の反撃を描くニ長調主題が軽快に響き、導入部と同じ静かな音楽で終わる。

第6曲 「激戦のあと」。プスコーフの乙女がロシアの戦死者たちへの愛と哀悼を歌う。伝統的なアリアを嫌ったプロコフィエフだが、古典的なロシア・アリア《イーゴリ公》

(69～87／ボロディン作)の《ヤロスラフの嘆き》が残響する。

第7曲 「アレクサンドルのプスコーフ入城」。凱旋するアレクサンドル軍と歓迎の賛歌。主に紹介すみの主題とその対位法的結合による。

作曲年代：1938～39年

初演：1939年5月17日モスクワ。作曲者の指揮による

楽器編成：フルート2、ピッコロ1、オーボエ2、イングリッシュ・ホルン1、クラリネット2、バス・クラリネット1、ファゴット2、コントラファゴット1、テナー・サクソフォーン1、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、テューバ1、ティンパニ1、小太鼓、タンブリン、マラカス、レーニョ(木)、トライアングル、シンバル、サスペンデッド・シンバル、大太鼓、鐘、シロフォン、タムタム、チャイム、ハーブ2、弦楽、メゾ・ソプラノソロ、混声合唱

(伊藤恵子)

プロコフィエフ カンタータ「アレクサンドル・ネフスキー」から歌詞対訳

Prokofiev “Alexander Nevsky”, cantata op.78

原訳・北川 剛
口語体補訳・N響「フィルハーモニー」編集室

2. Pesnya ob Alexandre Nevskom

A i bylo dyelo na Nyeveye ryekye —
na Nyeveye, ryekye, na bol'shoi vodye.
Tam rubili my zloye voinstvo —
zloye voinstvo, voisko shvedskoye.
Ukh! Kak bilis my, kak rubilis my!
Ukh! rubili korabli po dostochkam!
Nashu krov' rudu nye zhalyeli my
za vyelikuyu zemlyu russkuyu.
Gei! Gdye proshol topor, byla ulitsa,
gdye lyetyelo kopyo, pereulochek!
Polozhili my shvedsov nyemchikov,
kak kovyl' travu na sukhoi zhemlye.
Nye ustupim my zhemlyu russkuyu.
Kto pridyot na Rus', budyet na smyert' bit!
Podnyalasa Rus' suprotiv vraga,
podnimis' na boi, slavnoy Novgorod!

3. Krestonostsi vo Pskove

Peregrinus expectavi pedes meos in cymbalis...

4. Vstavaiyte, lyudi russkie

Vstavaiyte, lyudi russkiye,
na slavnoy boi, na smyertny boi;
vstavaiyte, lyudi vol'niye.
za nashu zhemlyu chestnuyu!
Zhivym boitsam pochot i chest',
a myertvym slava vyechnaya!
Za otchii dom, za russkii kraj,
vstavaiyte, lyudi russkiye!

Na Rusi rodnoi, na Rusi bol'shoi nye byvat' vragu:
Podnimaisa, vstan', mat' rodnaya Rus'!

Vragam na Rus' nye khazhivat',
polkov na Rus' nye vazhivat',
putyei na Rus' nye vidyvat',
polyei Rusi nye tapyvat'.

2. アレクサンドル・ネフスキーの歌

ネヴァ川のほとりの戦い
大いなる深き河で
悪魔のような大軍を
スウェーデン軍を われらは撃つ。
雄々しく戦うわれら!
船は碎けて飛び散る!
流れる血潮を惜しまず
母なるロシアのために。
まさかりをふりかざし
槍を飛ばし 道をひらく!
野ぜいの草のように
なぎ倒す兵士たちよ。
母なるロシアの大地。
襲い来る敵を倒さん!
今こそ立て わがロシア
立ちあがれ わがノヴゴロド!

3. プスコーフの十字軍士

兵士よ希望に燃えて進め 楽を奏しながら進め…

4. めざめよ、ロシア人民

めざめよ ロシアの民よ
はえある戦いに
めざめよ 自由の民
まもれ わが大地を!
行け 雄々しく戦え
尊い国のために!
家と祖国をまもれ
めざめよ ロシアの民よ!

祖国の地 敵に渡すまい
守りぬけ 母なるロシアを!

決して許すまい
襲いくる敵の侵略を
田畑を荒らす敵を
その道を閉ざそう

5. Ledovoe poboishche

Peregrinus expectavi pedes meos in cymbalis — est!
Vincant arma crucifera! Hostis pereat!

6. Myoatvoye polye

Ya poidu po polyu byelomu,
polyechu po polyu smyertnomu.
Poishchu ya slavykh sokolov,
zhenikhov moikh, dobrykh molodtsev.
Kto lyezhit, myechami porublyenny,
kto lyezhit, streloyu poranyenny.
Napoili oni krovyu aloyu
zemlyu chestnuyu, zemlyu russkuyu.
Kto pogib za Rus' smyertyu dobroyu,
potseluyu tovo v ochi myortviye,
a tomu molodtsu, shto ostalsa zhit',
budu vyerno zhenoi, miloi ladoyu,
Nye voz'mu v muzhya krasivovo:
krasota zymnaya konchayetsa.
A poidu ya za khrabrovo.
Otzovityesa, yasny sokoly!

7. V'ezd Alexandre vo Pskov

Na vyeliki boi vykhodila Rus'.
Voroga pobyedila Rus'.
Na rodnoi zemlye nye byvat' vragu.
Kto pridyot budyet na smyert' bit!

Vyesyelisa, poi, mat' rodnaya Rus'!
Na rodnoi Rusi nye byvat' vragu.
Nye vidat' vragu nashikh russkikh syel:
Kto pridyot na Rus', budyet na smyert' bit!

Na Rusi rodnoi, na Rusi boi'shoi
nye byvat' vragu!
Vyesyelisa, poi, mat' rodnaya Rus'!
Na vyelikii prazdnik sobralasa Rus'.
Vyesyelisa, Rus', rodnaya mat'!

5. 氷の上の戦い

兵士よ希望に燃えて進め—楽を奏しながら進め!
十字をささげよ! 敵をもほろぼせ!

6. 激戦のあと

雪の野を 私はさまよう
死の野原を越えて。
雄々しい人を求め
永遠の愛を誓った人を。
剣に倒れた屍
槍に裂かれた兵士。
尊い血潮で
清らかなロシアの大地を赤くそめた。
生命を捧げた勇士の
閉じた瞳にくちづけ
生命をつないだ若者には
真心ささげていたわろう
激しい戦いに
美しい大地は奪われた
いとしい人よ いまどこに。
空かける 若鷺は いまどこに!

7. アレクサンドルのプスコフ入城

激しいかった戦いに
われらは敵を撃ちくだいた。
母なる大地を侵す敵は
撃ちくだけ!

いざ歌え いざ祝え!
わがロシアに 敵はなし。
わが街に 敵はなし
襲いくる敵を撃て わがロシアに 敵はなし!

偉大なる わがロシアに
敵はなし!
いざ歌え 母なるロシアよ!
勝利に湧く わがロシア!
祝え、いざ歌え、いざロシア ああ!

次回(2月)の定期公演 聴きどころ

何日も後まで心に残る音楽を 聴かせてくれるアシュケナージ

近藤滋郎

■核心にせまろうとする真摯さ

2月の定期公演はA・B・Cの全プログラムで音楽監督ウラディーミル・アシュケナージの奥の深い音楽が楽しめる曲が並んだ。同時に、各プログラムに協奏曲が入っていないので、オーケストラにとっては気が抜けない月になりそうだ(協奏曲のときに手を抜いているということではなく、交響曲などとは緊張の度合いが違うというだけのことで、誤解の無いように)。しかしそれだけにオーケストラのさまざまな響きを、いろいろな角度から満喫できる月でもある。

アシュケナージは現役ピアニストのなかで5本の指に入る偉大な芸術家である。ところが指揮者としてのアシュケナージには、ともすると、この〈偉大なピアニスト〉であることが邪魔をしている気がしてならない。アシュケナージが指揮を始めたのは1970年代の中ごろのことだから、すでに30年以上のキャリアを持っている。30年間というのは、ふつう指揮者では50歳代の後半にあたり、中堅からベテランにさしかかっている頃だから、決して余技と言われるようなものではない。それでもいまだに「指揮をするピアニスト」と呼ばれることがあるのは、なんとも気の毒



ウラディーミル・アシュケナージ ©E.Sakata

なことだし残念なことである。アシュケナージが国際的にも有数の指揮者であることは、これまでに世界のトップ・クラスのオーケストラと関わってきたことが証明している。

アシュケナージの音楽には表面的な華麗さにとらわれることなく、音楽の核心にせまろうとする真摯さがある。その意味では地味ともいえるが、しかしこうした音楽こそが、虚仮威(とほご)しでハツタリの強い演奏よりもずっと心に浸み込んでくることは言うまでもない。演奏中は興奮して聴いていても、ホールを出たときには印象が薄れてしまう演奏が多くなっている昨

今、何日も後まで心に残る音楽を聴かせてくれるアシュケナーズの音楽が聴けることはとても嬉しいことである。

Aプロ：熟知しきったモーツァルトと、N響では初めてとなるマーラー、両曲ともに魅力的だ。モーツァルトの交響曲は1月のデュトワの《ハフナー》に続けてということになり、両指揮者の違いを感じ取ることも一興となる。ここ数年はモーツァルトの名演に接する機会が減っているのでアシュケナーズならではの味わい深い演奏を期待したい。

アシュケナーズのマーラーはN響では初めてである。当初は《第3番》が予定されていたが《第4番》に変更されたのは、昨年ソプラノのクララ・エクに出会ったからなのだろうか？ マエストロが強く推す新人で、次代のスターと評判の高いエクが聴けるのが嬉しい。

《交響曲第4番》はマーラーの交響曲のなかでは明快な作品で、そうした面が強調されることが少なくないが、たぶんアシュケナーズはそれだけの曲ではなく、より内面的な心の葛藤といったものまでも感じさせてくれるだろう。

■堀正文のソロが聴ける 《英雄の生涯》

Bプロ：生誕150年を迎えたエルガー作品は昨年のノリントン指揮に続いてのもので、イギリスでの活動が多いアシュケナーズにとっては特別な作曲家のような。名曲ながらも演奏される機会が少ない《エニグマ(謎)》でのオーケストラの多彩な響きが堪能できるだろう。名手揃いの管楽器奏者の〈個人技〉が聴きどこ

ろになる。R.シュトラウスの《英雄の生涯》は、全体もさることながら、コンサートマスター堀正文のソロに期待している。彼から「この曲はヨーロッパのオーケストラのコンマス試験には必ずといって良いほど選ばれる」と聞いたことがある、いわばコンマスとしての試金石的な作品でもある。N響の顔である堀正文のソロを聴き逃す手はない。しかも指揮者が、堀が心酔しているアシュケナーズだけに面白いものになりそうだ。

Cプロ：アシュケナーズ指揮N響のチャイコフスキーの交響曲は今月の《第2番》と《第5番》、そして6月の《マンフレッド》でひとまず完結する。生国の大作曲家への想いは誰よりも大きなマエストロだけに名演を期待してよいだろう。《第5番》もさることながら、個人的には、あまり演奏されることのない《第2番》が聴けるのが楽しみだ。ウクライナ(小ロシア)色の濃い作品をどのように聴かせてくれるのだろうか。《第5番》は昨年11月にネルロ・サンティが名演を聴かせてくれた(Aプロ)ばかりだが、アシュケナーズはより体臭の濃いチャイコフスキーになるのではないだろうかと思像している。もっともロシアのオーケストラの泥臭さよりは洗練されたものになるのだろうか。

*

いずれにしても今月の定期演奏会では、A・B・Cそれぞれのプログラムで、ウラディーミル・アシュケナーズの高い芸術性に触れ、N響の豊かな響きが味わえそうである。

(文中敬称略)

(こんどうじろう 音楽評論家)